

本論文は、フランスのMagnan、ドイツのKahlbaum、HeckerなどからKraepelin、Bleulerを経て、DSM-III登場に至るまでの「統合失調症」の臨床類型記述の歴史を、1980年時点の臨床的視点を軸に追ったものである。1980年にDSM-IIIが登場する直前の、あるいはまさに登場する時点の、わが国の精神医学における統合失調症把握の状況を伝えるものとして貴重である。著者らは、統合失調症の心因的側面の研究、特に家族関係に関する研究に草分け的に関与した3人の碩学である。したがって、本論文は、統合失調症という病態を何らかの形で「手の触れられるもの」、「目鼻のつけられるもの」にしようとして臨床上の経験を重ね、記述し、世界の文献を渉猟して達した知を基盤に書かれた論考といってよい。

本論文出版の頃以降、世界的規模で、DSM-IIIに依拠した統計手法による統合失調症の病型分類、症状分類に関する知見が蓄積されることになるのだが、そうした知見の蓄積を咀嚼した目から改めてこの論考を読むとき、当時の臨床類型概念における理論それぞれの優れた点、不足な点、過剰な点などがよく見えてくる。そしてそれと同時に、統合失調症に関する新しい知見の蓄積が真に示しているのはどういうことかも、また見えてくる。本論文は、疾病分類について長く考察してきた著者らによって、伝統的な思考法とDSM-IIIという新たな疾病分類との繋ぎ目という位置を十分に意識して書かれたものである。本論文を読むことによって、われわれは、われわれの統合失調症概念のいわば根に当たる部分をいま一度、詳細に見直すことになる。これは、統合失調症という概念がその概念の意義を問われている今日こそ、ぜひとも有したい読書体験である。

また、本論文が書かれたのは、統合失調症の軽症化ということがいわれ、「寡症状性分裂病」、「単純型分裂病」、「自己内省型分裂病」などへと関心が集まっていた時代である。いわば、この時代は統合失調症という領域に一つの流動性、変化の兆しが現れていた時代といえるだろう。Blankenburgの『自明性の喪失』が出版され、症例アンネ・ラウの内省的訴えのなかに統合失調症の本質をとらえようとする試みが多く、精神病理学者の関心を集めていた。そしてまた、その一方で、境界例という概念が盛んに論じられ、その病理について多くの考察がなされた時代である。境界例には統合失調症型人格障害(Schizotypal Personality Disorder)と境界型人格障害(Borderline Personality Disorder)という形でDSM-IIIに収められることになる二方向の病態が含まれていた。本論文では、それらの類型の外延についても論じられている。また、緊張病という概念のなかにある問題性を論じながら、非定型精神病論へのつながりという点も取り上げられている。統合失調症が症状を中心に、つまりはエピソードにおける病態を中心に診断されるようになってきた今日、統合失調症概念と非定型精神病概念との重なり、相違点を知っておくことは、臨床的にきわめて有用な多くの情報をもたらしてくれるだろう。

DNAに関する研究の知見から、統合失調症と躁うつ病とのあいだに共通点をみる単一

精神病への視点が復活しようとしている現在、伝統的な精神医学がどのような症状記述に支えられていたかをみておくことは、きわめて意義深い。

著者らは、本論文のなかで、過度に理論的であることを避け、「記述的」であることに心を砕いている。この場合、「記述的」であるとはどういうことか、それはDSM-IIIにおける記述とどのような違いがあるのか、本論文を通してその違いを体験することは、いわば一つの文化体験である。

本論文は、病前のあり方、発症の様態、発症の年齢、初発時の病像、経過、治療への反応などをセットにして記述がなされ、分類が行われようとしていた時代の記述精神医学の一つのピークを伝えるものなのである。

(鈴木國文)